

稲作情報第1号

令和8年3月 4日～

令和8年3月24日

(育苗)

JA夢みなみ(すかがわ岩瀬地区・あぶくま石川地区)、県中農林事務所須賀川農業普及所

1 気象庁発表 東北地方3ヶ月予報(3～5月)

2月24日発表の3ヶ月予報では、気温は高い確率が50%で、平年より高くなる見込みです。

2 育苗準備

重要

令和8年播種用の「夢の香」及び「ひとめぼれ」準種子については、登熟期間中の高温の影響により、発芽率が本種子の基準である90%に満たない種子です。

発芽の遅れやばらつきが生じるおそれがあることから、例年以上に播種前の準備(浸種・催芽)を丁寧に行う必要がありますので、御理解のほどよろしくお願いいたします。

(1) 種子の準備

塩水選

○購入種子でも実施しましょう。使用する塩水の比重はうるち米で1.13、もち米で1.10です。

○塩水選後は軽く流水ですすぎ、粃表面の塩水を落とします。

種子消毒

○高温により発生しやすい「もみ枯細菌病」の被害が増えています。未消毒種子を使う際は、もみ枯細菌病に登録のある薬剤(モミガードC水和剤、テクリードCフロアブル)などを処理しましょう。

(2) 浸種と催芽

浸種

○水温 12～15℃で7～10日間、積算水温 100～110℃(ひとめぼれは休眠が深いため 120℃)で行います。

○水温が低い(10℃以下)と、発芽の不揃いや種子消毒の効果が低下する原因となります。

○種粃袋には、余裕をもって八分目以下に種子を詰めます(ホームーネットに4kgが目安)。

ぎっしり詰めると中心部が酸素不足となり、発芽が不揃いとなります。

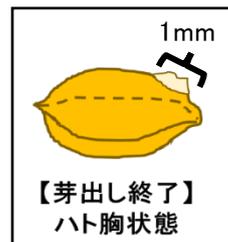
○薬剤の効果を高めるために、浸種開始から2～3日間は水を交換しないようにします。

その後は、酸素供給のため1～2日の間隔で水を交換しましょう。

催芽

○30℃以上で、もみ枯細菌病が発生しやすくなるため、設定温度は28℃としてください。

○ハト胸状態(芽の長さ1mm)になったら芽出しを終えてください(右図参照)。



(3) 播種

○苗の種類に応じて適正な播種量としてください(表1)。

老化苗とならないよう、田植え日から逆算して育苗を開始しましょう。

○播種ムラがあると、移植時の欠株の原因となります。

密苗・密播の場合、移植時のかき取り量が小さいため、特に注意が必要です。

表1 標準的な播種量と苗の種類別目標生育量

	播種量 (乾粃 g/箱)	育苗日数 (日)	草丈 (cm)	葉齢 (葉)
稚苗	200	20～25	10～13	2.2～2.5
中苗	100	30～35	13～15	3.0～3.9
高密度播種移 (密苗・密播)	250～300	15～20	10～12	2.0～2.3

※播種量は催芽粃の場合、乾粃の約1.2倍量となります。

(4) 育苗期の病害対策

- 30℃以上の高温で、もみ枯細菌病や苗立枯病などが出やすくなります。
- 5℃以下の低温で、ムレ苗や苗立枯病(ピシウム)が出やすくなります
- もみ枯細菌病や苗立枯細菌病が発生した育苗箱は、ハウスから持ち出し処分してください。

事前予防のために灌注による薬剤防除を行きましょう(表2)

覆土後の使用可

表2 育苗期の主要な病害と対応する農薬例

病名 (病原菌)	主な症状	多発条件	ダコレート	タチガレエース	ダコニール	ナエファイン
			水和剤	M液剤※	1000	フロアブル※
リゾープス	白いカビ(覆土表面)	出芽期の高温	○		○	○
苗立枯病	フザリウム	白やピンクのカビ (地際や糞)	○	○		○
	ピシウム	カビは見えない。 ドーナツ状の枯れ		○		○
	トリコデルマ	緑のカビ(覆土表面、 種籾周囲)	○			
細菌	もみ枯細菌病	坪状に枯れ、心葉が 容易に抜ける。	覆土後に使用できる薬剤はないため、 播種後覆土前に 種籾の上からカスミン粒剤(15~20g/箱)を散布			
	苗立枯細菌病	坪状に枯れ、基部が 白化。				

※タチガレエース M液剤とナエファインフロアブルは根の生育促進、移植時の活着促進効果も期待できます。

3 土づくり

(1) 作土層の確保

- 作土が浅いと、根域が狭く、肥料の吸収効率の低下や、根張りが弱いことによる倒伏のリスクが高まるため、**15~20cmの作土層を確保**しましょう。

(2) ケイ酸資材の施用

- 施用により稲体の強化(倒伏軽減)、受光体勢の改善による登熟の向上が期待できます。

(3) 吸収抑制対策

- 過去にカリの上乗せ施用を行ったほ場でも、基肥以外のカリ供給を行わないと、徐々に土壤中の交換性カリ含量が低下し、玄米中の放射性セシウム濃度が高まる恐れがあります。
- 交換性カリ含量が**目標値 25mg/乾土 100g以上**となるよう塩化カリを施用したうえで、慣行の基肥を施用しましょう(表3、4)。
- 堆肥の施用**も吸収抑制対策に効果的です。

表3 施用すべきカリウム量の目安

交換性カリの 土壌分析値 (mg/乾土 100g)	交換性カリの目標値 25mgを確保するために 必要なカリ成分量 (成分量 kg/10a※)	左に相当する 塩化カリの施用量 (現物量 kg/10a)
5	30	50
10	23	38
15	15	25
20	8	13
25以上	0	0

※作土層を15cm、土の仮比重を1と仮定した試算値

表4 標準的な施肥量の目安(成分 kg/10a)

品種	窒素		リン 基肥	カリ 基肥
	基肥	追肥		
コシヒカリ	3~4	1.5~2	8	10
ひとめぼれ	6	2	7	8
チヨニシキ				
里山のつぶ	6~8			
天のつぶ				
ふくひびき	8	2~4		

 今シーズン初めて農業機械を使用する前に、安全点検の徹底をお願いします

県中農林事務所須賀川農業普及所 電話(0248)-75-2180
 ご不明の点は、JA夢みなみ、須賀川農業普及所にお問い合わせください
 次回の発行予定日は令和8年3月25日(水)です。

本資料は、令和8年3月2日現在の農薬登録情報を基に作成しています。農薬使用の際は、最新情報を確認願います。